FREE PAPER Hoo-JA! フリーペーパー ホージャ!
新居浜&西条の地域情報
2025年(令和7年) 7月26日(土)発行／Vol.502

短期集中連載 第2回

市立新居浜商業高校
甲子園 準優勝の軌跡
～ 50年前、一番暑かった新居浜の夏 ～

この連載は平成31年2月～令和元年7月、「神郷公民館だより」に掲載された連載(執筆:渡部 強氏)に編集部が加筆・修正したものです。 ※文中敬称略

新居浜商、堂々の初勝利。そしてベスト8入り

今から50年前、1975年(昭和50年)開催の「第57回全国高校野球選手権大会」いわゆる「夏の甲子園」で、新居浜商業高校が初出場で準優勝を成し遂げた。その快挙は市民に感動と勇気をもたらし、それまで**「アライハマ」**と呼ばれていた**「新居浜」**の名が、全国に知れわたる出来事となった…。

昭和50年「第57回全国高校野球選手権大会」は、8月8日午前9時、開幕。永井文部大臣の始球式で、熱闘の幕が切って落とされた。開会前の新聞には**「群を抜く東海大相模、追う習志野、土佐、早実」**の見出し。東海大相模にはスーパースター・原辰徳選手(元巨人軍監督)が在籍。新商の選手も開会式前に「原がおるぞ！見に行こ！」と原選手のスター性に浮き足立っていたとか…。

新商の初戦は、大会2日目、8月9日第4試合。相手は九州学院(中九州代表・熊本県)。1番から9番まで切れ目のない打線、機動力も兼ね備えた11年ぶり2度目の強豪チーム。試合開始は午後5時30分、大会初のナイターに。三塁側応援席には、泉敬太郎市長、渡部荒市議会議長の姿も。九州学院は、五回まで毎回ヒット、常に塁上にランナーを置く厳しい攻撃。一方の新商、四回に1点の先取点をあげるが、八回に同点に戻される。しかし九回、3安打1四球で決勝の2点を奪い、九回裏の攻撃を抑えて3-1で夏の甲子園、念願の初勝利。

同日同時刻に新居浜では「にいはま花火大会」が開催。国領川河川敷には大勢の観客がラジオのイヤホンを耳に花火鑑賞。花火が打ち上げられるたびに歓声が上がるが、花火は上がっていないのに、新商のチャンス時は花火以上の歓声が河川敷に響き渡った。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
新居浜商	0	0	0	1	0	0	0	0	2	3
九州学院	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

第2戦は、大会8日目。初陣の新商は夏3度目出場の三国(福滋代表・福井)との対戦。1点を争う試合となり、六回裏三国の攻撃、ノーアウト満塁のピンチを投手ゴロに打ち取りダブルプレー、続く打者も三振でピンチを切り抜けた。七回まで共に無得点。そしてこの日は8月15日、戦後30年たった終戦記念日。試合途中の正午、約5万人の観衆と球児たちは、戦没者の冥福を祈って1分間の黙祷…。

余談だが、この新商の黙祷シーン、2022年に放送されたNHK連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」内で、1975年の夏休みの情景として、錠一郎(オダギリジョー)と長女ひなた(新津ちせ)が、茶の間でそうめんを食べるシーンのテレビ画面にも登場している。

黙祷後の新商の攻撃。八回表、2番大麻が右中間を破る三塁打。続く3番村上が一塁横を抜き待望の決勝点。九回裏にはワンアウト一・三塁のピンチにサード・山内が好捕、そして好送球で本塁アウトにした。エース・村上は三国打線を3安打完封、投打に活躍して1-0で勝利。ベスト8入りを果たした。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	計
新居浜商	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
三　国	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

当時のアルプススタンド入場券（読者提供）

三国戦の新居浜の応援席には、応援団とブラスバンドの滞在組に加えて、新居浜からバス16台、そしてフェリーで合計約3,000人が駆けつけた。アルプススタンドからは「ソーリャ！ソーリャ!!ソーリャ！ソーリャ!! 」の掛け声が絶えず、その光景を『ミニ新居浜』と当時の新聞は例えている。

新居浜市内の商店街は、試合中の3時間近くは閑散。また「励ます会」の近藤広仲会長(新居浜商工会議所会頭)も、この日は自宅でテレビ観戦。試合終了後に「励ます会で宿泊費用などは、優勝戦まで行ってもドンと来いです」と、頼もしい談話を残していた。

次の試合は準々決勝。しかし、台風5号の影響で、3日間の雨天順延を余儀なくされることになる…。 (次号に続く)